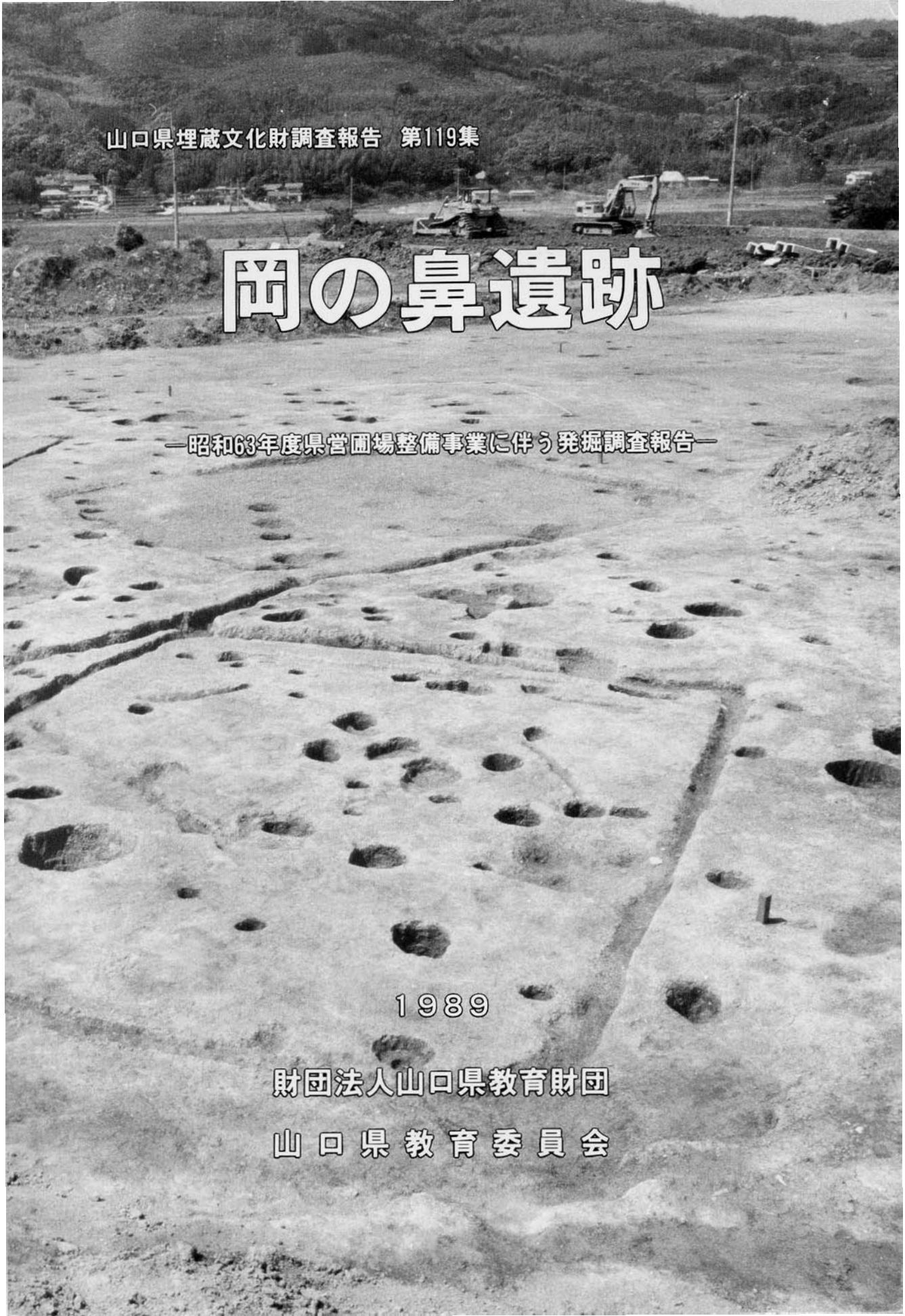


山口県埋蔵文化財調査報告　第119集

岡の鼻遺跡

—昭和63年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

1989

財団法人山口県教育財団

山口県教育委員会

序

本県では、恵まれた自然環境のなか、豊かな地域社会の実現に向けて、農業基盤整備事業等の諸施策を推進していますが、これらの事業に伴う開発工事等からかけがえのない埋蔵文化財を保護するとともに、開発と文化財保存との調和のとれた県土づくりを行うため、財団法人山口県教育財団並びに山口県教育委員会は、圃場整備事業に係る埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。昭和63年度に実施した油谷町所在の岡の鼻遺跡の調査では、弥生時代と古墳時代の集落跡が発見されて、当時の人々の生活や文化を知る上で、貴重な資料を数多く得ることができました。本書は、その調査結果をまとめたもので、学術・教育の資料として利用されることはもとより、ふるさとづくりの基礎資料として広く活用されることを願うものであります。

おわりに、調査に当たりまして御指導・御協力をいただきました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成元年２月

(財)山口県教育財団　理事長　高　山　　治

山口県教育委員会　教育長　高　山　　治

例　　言

1．　本書は、県営圃場整備事業に先立って昭和63年度農林水産省・文化庁国庫補助金を受けて実施した岡の鼻遺跡（第Ⅰ・Ⅱ地区）発掘調査の成果と、文化庁国庫補助金を受けて実施した遺跡詳細分布調査（第Ⅲ地区）の成果を合わせて報告する「発掘調査報告書」である。

2．　発掘調査の実施に当たっては、山口県耕地課、萩土地改良事務所、油谷町教育委員会並びに地元関係各位から協力・援助を戴いた。

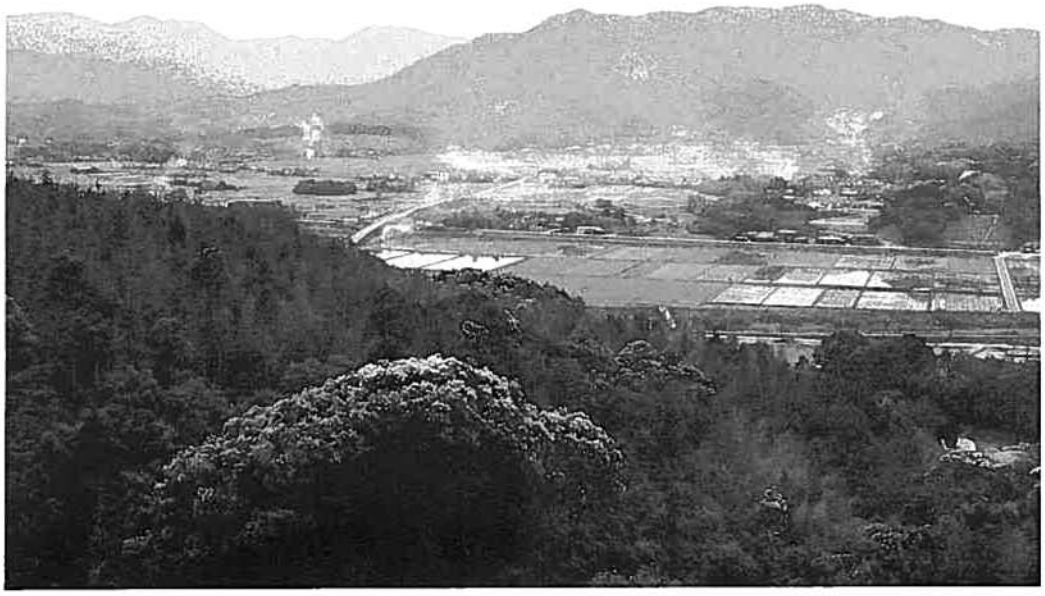
3．　調査は、財団法人山口県教育財団事務局指導主事　高井孝則・藤本憲司・阿字雄徹・福坂通恭、山口県埋蔵文化財センター指導主事　村岡真樹及び文化財専門員　村岡和雄・西岡義貴があたり、木村明史調査員の応援を得た。

4．　出土石器の鑑定については、山口県立山口博物館専門学芸員橋本恭一氏の指導・助言を得た。

5．　本書に掲載した遺跡位置図は、国土地理院発行の50,000分の１地形図「仙崎」を使用した。

6．　本書に使用した方位は磁北で標示し、レベルは海抜標高である。

7．　本書の作成・執筆・編集は山口県埋蔵文化財センター次長中村徹也の指導・助言を得て、高井・福坂が主として担当した。



▲遺跡遠景（北から）

目　　次

Ⅰ　位置と環境 …… 1

Ⅱ　調査の概要 …… 2

Ⅲ　主な遺跡と出土遺物 …… 5

　1．住居跡と主な出土遺物 …… 5
　2．周溝墓状遺構 …… 9
　3．掘立柱建物と土壙 …… 15

Ⅳ　まとめ …… 16

Ⅰ　遺跡の位置と環境

岡の鼻遺跡は、山口県大津郡油谷町大字久富に所在する。

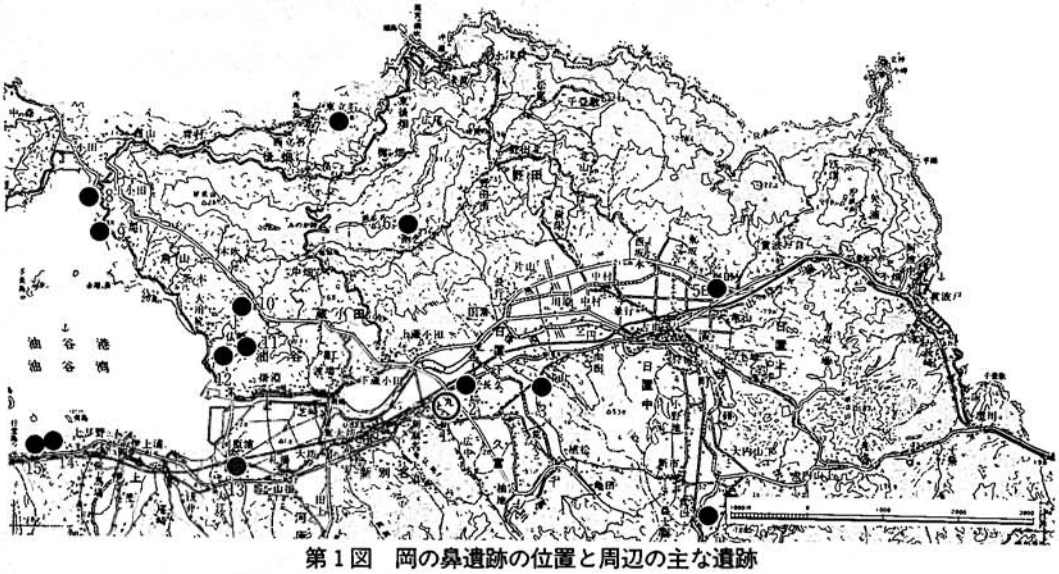
油谷町は北浦地方の中央部に位置し、北に日本海を望み、南に長門市、東に日置町、西に豊北町と接する。町の北には、雨乞岳など玄武岩や第三紀層からなる低い山地が連なる。中央低地は、油谷湾に流入する掛淵川の流域に発達した盆地状の低地で日置平野とも呼ばれ、北浦沿岸では最大の面積をもつ平野である。日置平野は、小起状丘陵に囲まれた東西に長い低地で、谷底平野、三角洲平野、干拓地、砂礫台地、扇状地からなる。

岡の鼻遺跡のある一帯は地形区分では砂礫台地にあたり、南から北に向かって舌状にのびた先端部北端に位置する。標高約18m の台地上に立つと、眼下に掛淵川・油谷湾を望み、背後に山塊がせまり、農耕・狩猟・採集・漁撈などの生産活動の場として最適な立地条件を満たしている。

北浦地方における人々の生活の営みは縄文時代に始まる。油谷町北部にある雨乞岳（標高約280m）の南傾斜から採集された撚糸文土器や押型文土器をはじめとする縄文時代早期から前期にかけての遺物は、縄文人の存在を物語っている。

北浦弥生社会成立は、弥生時代前期末にはじまり中期にはムラの数が増大する。油谷町向津具本郷安佐（通称王屋敷）とよばれるところから、有柄細形銅剣が発見されたが、これを所有したムラ長は北浦を代表する勢力であったかもしれない。

古墳時代の墓である古墳は各地に点在しているが、その大部分は横穴式石室を持つ小規模な円墳であり、前方後円墳のような首長墓と思われる規模の墓はまだ発見されていない。



第１図　岡の鼻遺跡の位置と周辺の主な遺跡

1.**岡の鼻遺跡** 2.長久遺跡 3.峠山古窯群 4.高畑遺跡 5.堀田遺跡 6.雨乞台遺跡 7.大神山古墳 8.赤崎古墳 9.水垂古墳 10.法師坊古墳 11.長田古墳 12.仏崎古墳 13.十ケ森古墳 14.白方古墳 15.前方古墳

Ⅱ　調査の概要

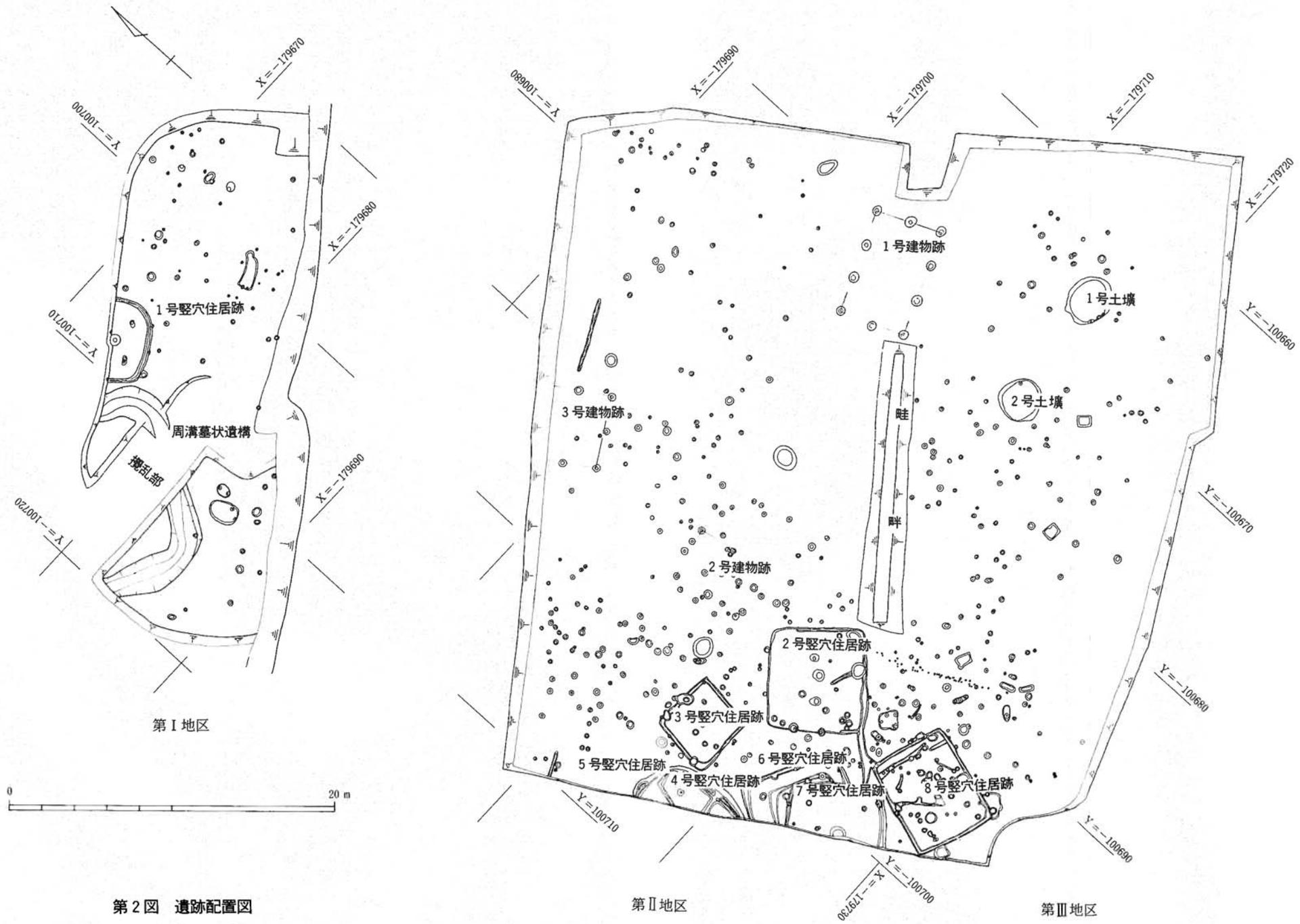
この遺跡は、農業生産基盤の整備をめざす油谷町久富地区の圃場整備事業の途上で遺物の散布がみられたもので、工期の変更をおこない発掘調査するとともに、さらに周辺部についての遺跡の分布状況を調査した。岡の鼻遺跡は所在地の小字名を冠して名付けられた。調査は、財団法人山口県教育財団が山口県農林部から委託を受け、さらに山口県教育委員会が文化庁の国庫補助を受けて両機関が共同で行うこととなり、両調査を昭和63年４月12日から５月17日まで実施した。圃場整備事業の途上での発見ということもあり、遺構上層まではすでに削土されていたが、遺構にはいたっておらず、調査区は分布状況から現況地目と畦畔によって便宜的にⅠ・Ⅱ地区に分けて発掘調査を実施することとした。なお、同時に行った久富地区分布調査により、Ⅱ地区の南側に隣接した区域に遺構が確認されたため、Ⅲ地区とし、関連する遺跡としてこの報告書において総括して報じるものとした。

この遺跡の基本層序は第一層水田耕作土、第二層床土、第三層黄褐色粘質土（地山土）であり、第三層上面から遺構が検出された。

Ⅰ地区はⅡ・Ⅲ地区に比べて２ｍ程の段差があって低くかなり攪乱されていた。北側中央部から隅丸方形の竪穴住居跡１軒、西側で周溝墓らしい遺構が１基検出された。遺構自体はすでに水田耕作でかなり破壊されていたが、復元推定した結果、全体の形状から方形周溝墓の可能性があることがわかった。

Ⅱ・Ⅲ地区の西側に当初の予想をはるかに上回る７軒の方形竪穴住居跡が密集し、東側には２間×３間の掘立柱建物１棟、Ⅱ地区の北側中央と中央西寄りにそれぞれ１棟ずつの掘立柱建物が検出された。また、Ⅲ地区では、分布調査の結果、住居・建物遺構のほかに２基の中世の土壙が検出され、岡の鼻遺跡全域で弥生時代から中世にかけて、断続的ではあるが人々が生活を営んできたことをうかがわせる。

◀作業風景


X=−179670
Y=−100700
X=−179680
Y=−100710
1号竪穴住居跡
周溝墓状遺構
撹乱部
X=−179690
Y=−100720
第Ⅰ地区
0
20 m
Y=−100680
X=−179690
X=−179700
X=−179710
X=−179720
1号建物跡
1号土壙
Y=−100660
3号建物跡
畦
2号土壙
Y=−100670
2号建物跡
2号竪穴住居跡
Y=−100680
3号竪穴住居跡
5号竪穴住居跡
6号竪穴住居跡
4号竪穴住居跡
7号竪穴住居跡
8号竪穴住居跡
Y=100710
Y=−100690
X=−179730
Y=−100700
第Ⅱ地区
第Ⅲ地区

第2図　遺跡配置図

Ⅲ　主な遺構と出土遺物

今回の調査で発見された遺跡は、弥生時代終末期の周溝墓状遺構１基と古墳時代前期の竪穴住居跡８軒、そのほか掘立柱建物３棟・土壙２基・柱穴多数である。

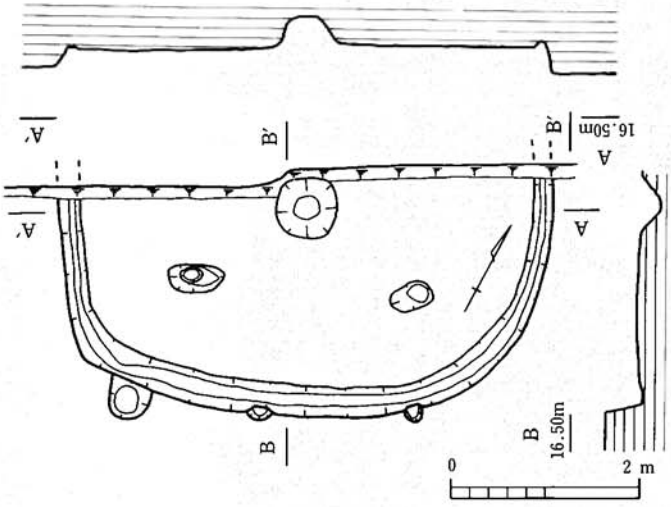
周溝墓状遺構

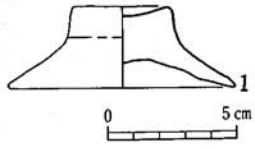
遺跡（舌状台地）北端に位置するＩ地区の西側から発見された遺構である。幅約２ｍ、深さ約40cmの方形Ｕ字溝の南部約８ｍ、北東部約４ｍが残存しているが、主体部があったと推定される中央部は約４ｍにわたって削平を受けている。周溝の外側の肩は、内側に比べてゆるやかに立ち上がる。周溝の埋土は黒褐色粘質の単一土で、床面に張り付いた状態で壺の口縁部、押し潰された状態で甕が１点出土した。埋土中位からは礫・土器片が多量出土した。また、埋土上位からは、須恵器の坏蓋（完形）・土師器の壺・甕が出土した。

竪穴住居跡

検出された住居跡は、方形住居跡８軒（隅丸方形１軒）である。集落跡は隅丸方形１軒を除いて、舌状台地の先端から約50m山麓よりの平坦地西側に集中している。一辺４ｍ～７ｍの方形で、すべての住居跡が周溝を持つ。主柱穴は３号住居跡を除いては削平のため不明。２号住居跡は住居の南端に直径約90cm、深さ約17cmの炉（カマドの可能性もある）をもつが、中央から炉を経て７号住居跡につながる排水溝が特徴的である。６号住居跡と、７号住居跡との切り合い関係は、土層断面から７号住居跡を６号住居跡が切っており、７号住居跡の廃屋の後、６号住居跡が建てられた事が分かる。６号住居跡はベッド状遺構をともなう。

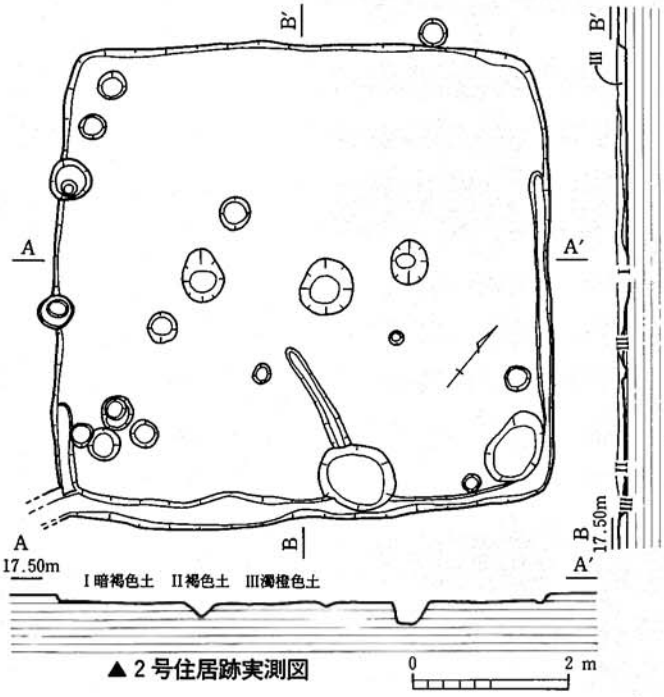
１．竪穴住居跡と主な出土遺物



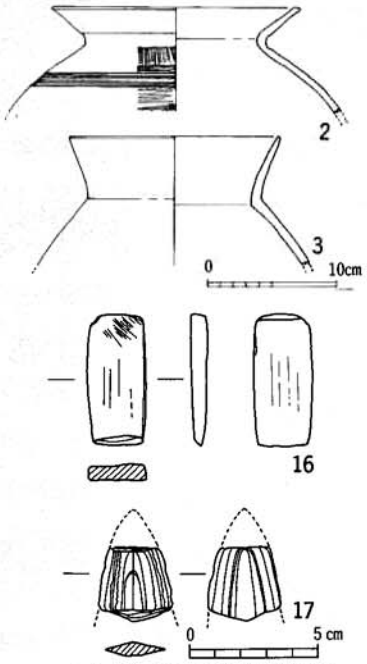


▲１号住居出土遺物実測図

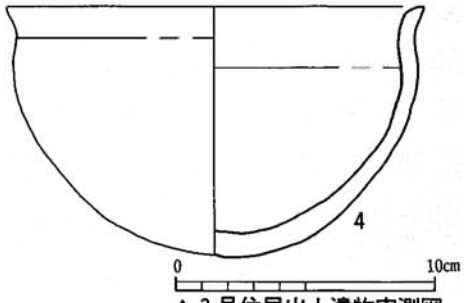
◀１号住居跡実測図



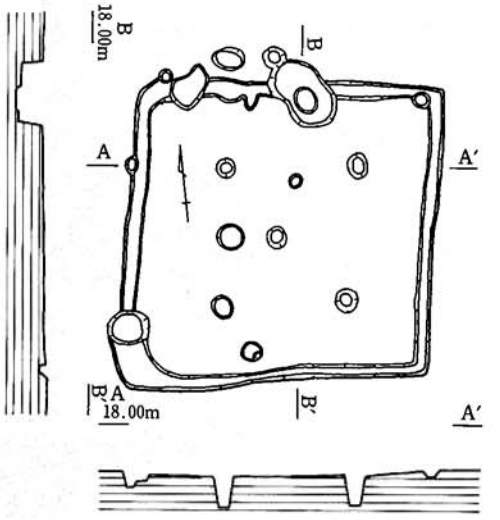
▲2号住居跡実測図



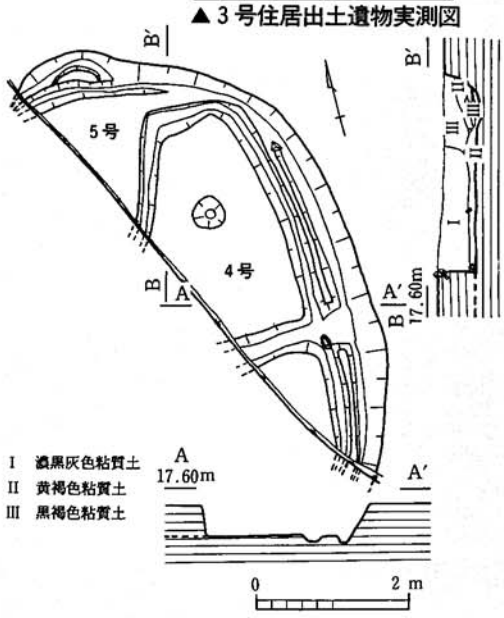
▲2号住居出土遺物実測図



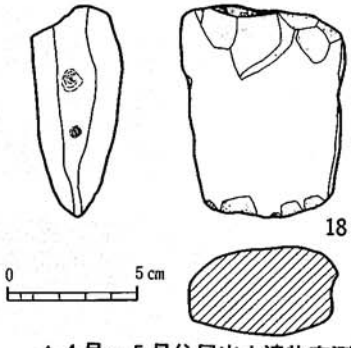
▲3号住居出土遺物実測図



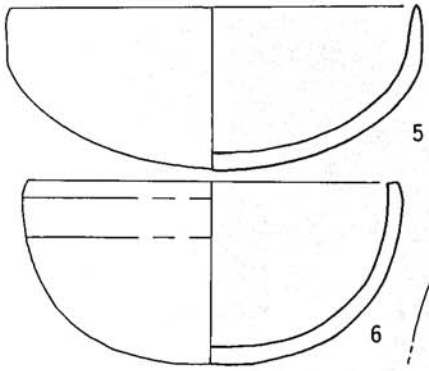
▲3号住居跡実測図

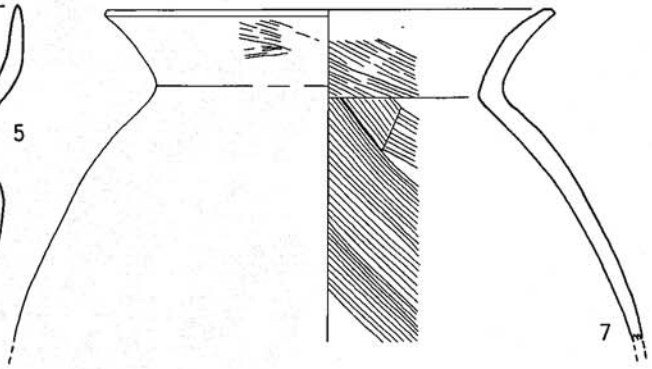


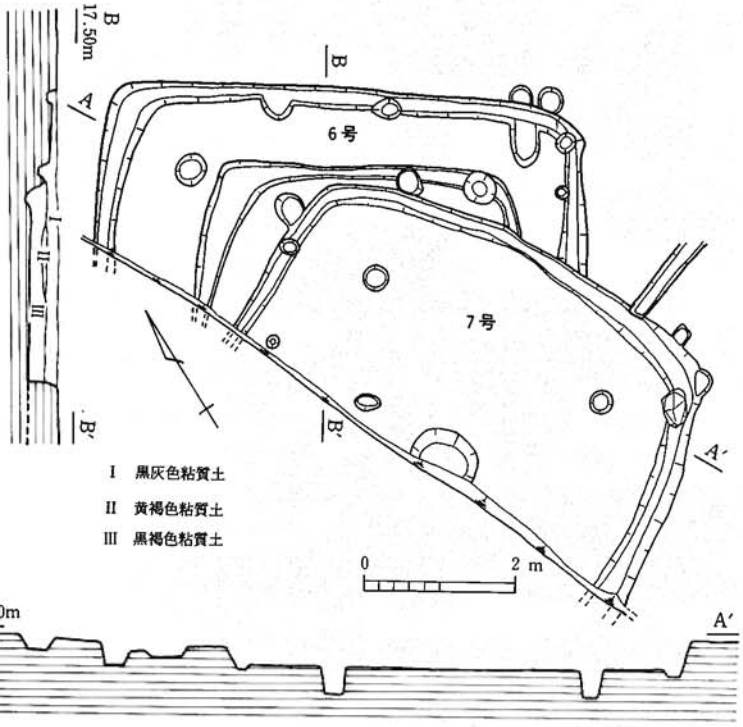
▲4号・5号住居跡実測図



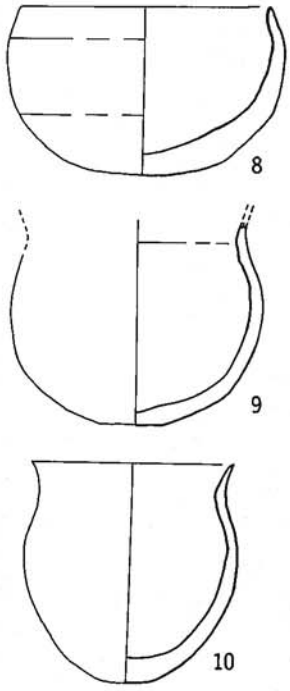
▲4号・5号住居出土遺物実測図

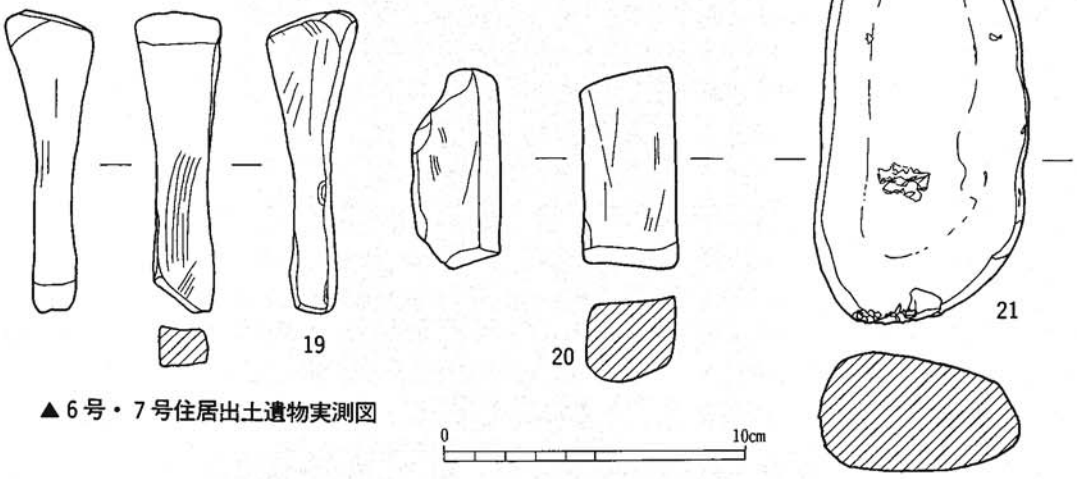




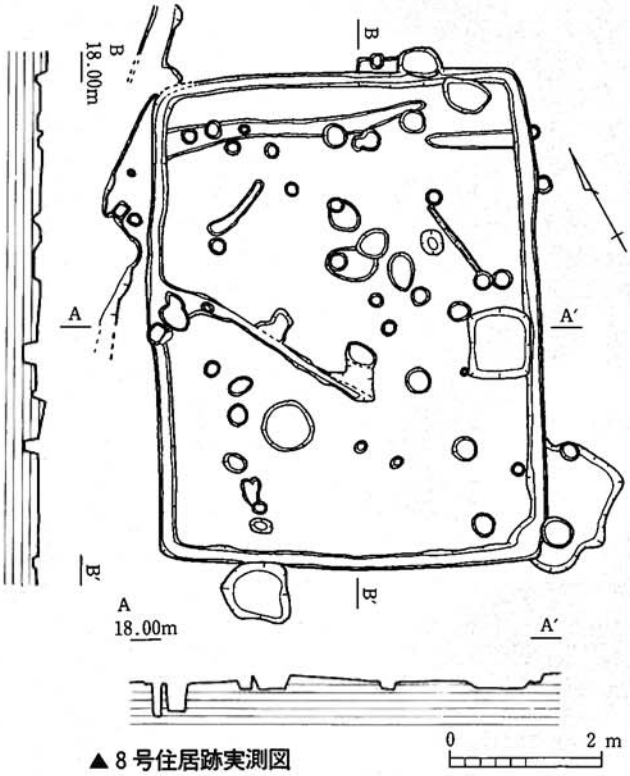


▲6号・7号住居跡実測図

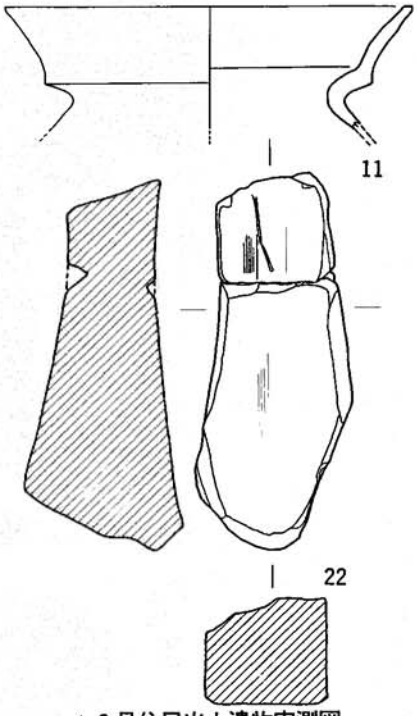




▲6号・7号住居出土遺物実測図



▲8号住居跡実測図



▲8号住居出土遺物実測図

▲2号・7号・8号共有溝出土遺物実測図

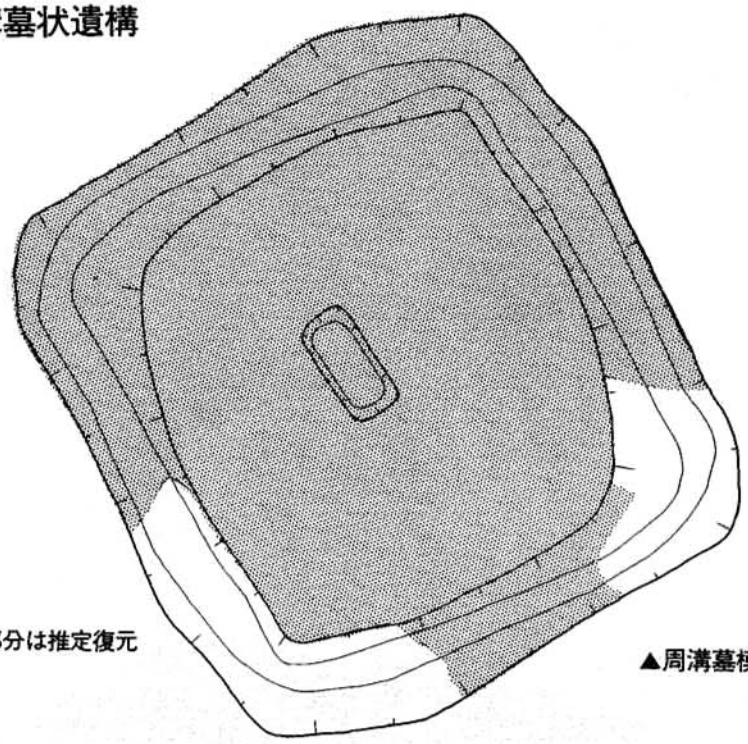
0 10cm

第1表　岡の鼻遺跡竪穴住居跡一覧表

住居番号	平面形	直径または長軸×短軸 (m)	残存壁高 最高 (cm)	残存壁高 最低 (cm)	主柱穴数	炉跡 径 (cm)	炉跡 深さ (cm)	床面積 (m²)	周溝規模 幅 (cm)	周溝規模 深さ (cm)	切り合い 旧→新	備考 (出土遺物)
1	隅丸方形	5.2×(5.0)	40	20	2＋α	62	30	(26.0)	14	7	—	北半分削平 低脚杯
2	方形	6.4× 6.0	12	8	—	90	17	38.4	15	10	—	甕・壺・砥石・石剣 柱状片刃石斧
3	方形	4.2× 4.0	6	0	4	—	—	16.8	20	10	—	椀
4	方形	5.4× —	46	40	1＋α	—	—	—	10	10	5号→4号	壺・椀・皿・石斧
5	方形	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	――――
6	方形	6.2×(6.0)	21	15	2＋α	—	—	(37.2)	20	—	6号→7号	壺・椀・砥石 坏身(須恵器)
7	方形	7.0× 6.4	48	43	2＋α	30	36	(44.8)	20	7	6号→7号	高坏・甕・壺 椀・たたき石
8	方形	6.4× 4.8	9	7	2＋α	—	—	30.7	15	6	—	壺・砥石

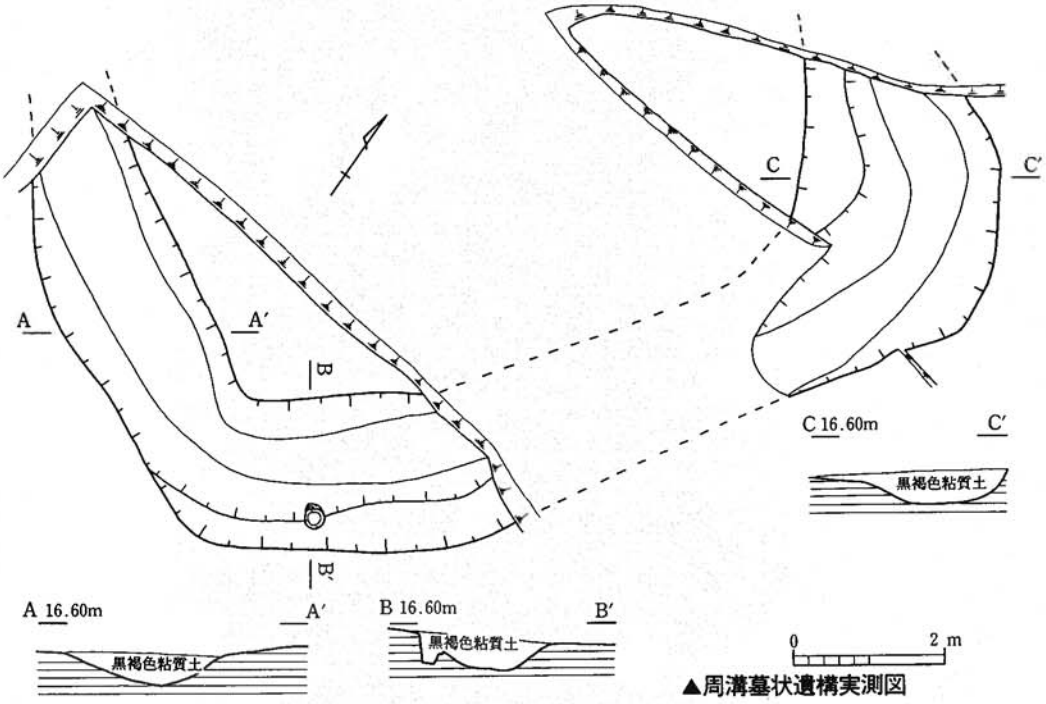
(　) は推定値である。

2．周溝墓状遺構

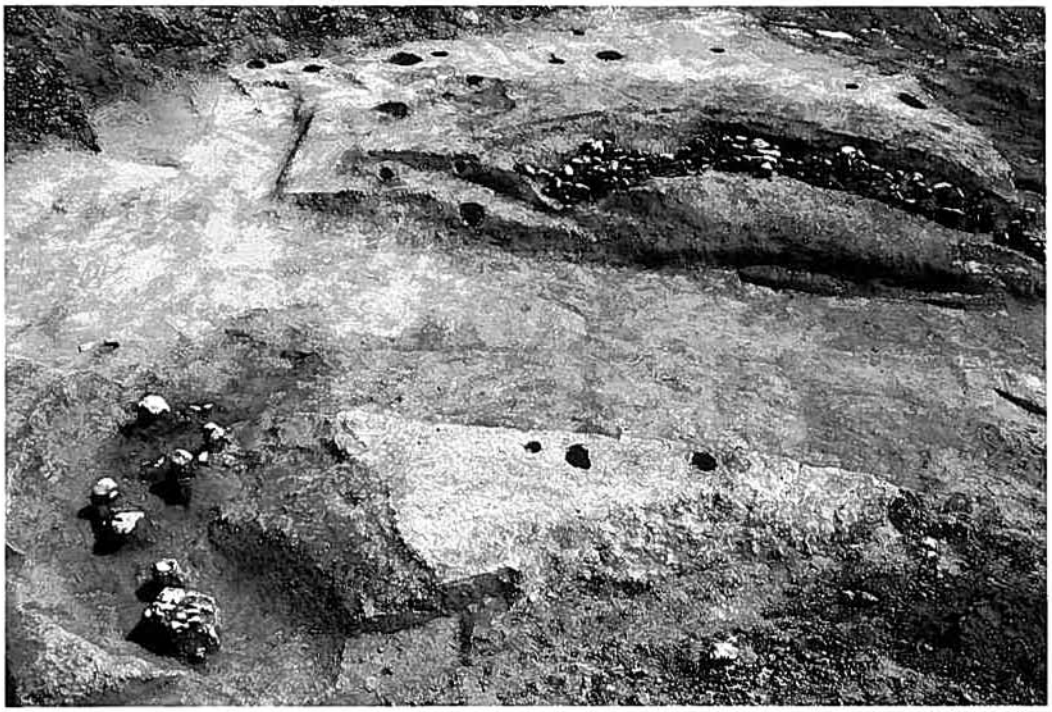


アミカケ部分は推定復元

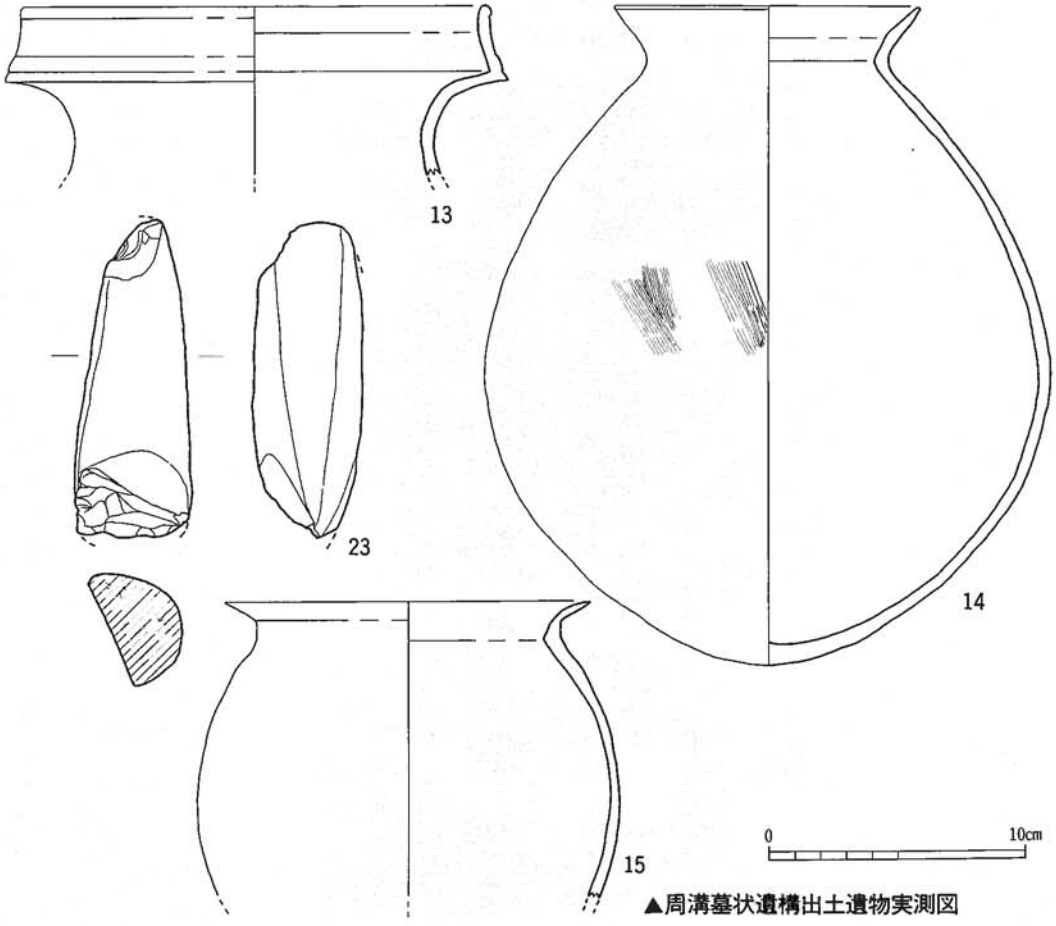
▲周溝墓模式図



▲周溝墓状遺構実測図



▲周溝墓状遺構



▲周溝墓状遺構出土遺物実測図

第2表　出土土器観察表

挿図 図版	器種	法量 (cm)	形態・調整	胎土 焼成	色調	出土 遺構
1 2—1	土師器 低脚杯	底(8.8)	脚部。杯部は欠損のため不明。脚は接合部より下方へ広がり、端部は尖りぎみに丸くおさまる。全体に摩滅のため調整不明。	粗砂多 軟質	赤褐	1号 住居跡
2 2—2	土師器 甕	口(19.0)	内弯して立ち上がる胴上部に、くの字形に外反するやや長い口縁部が続く。口縁外面は横ナデ。胴上部外面はハケ目。	含細砂 硬質	橙	2号 住居跡
3 2—3	土師器 壺	口 14.3	内傾する胴上位にやや外傾する長い口縁部が続く。口縁端部はやや丸みをもつ。内、外面とも摩滅のため調整不明。	含細砂 硬質	灰白	2号 住居跡
4 2—4	土師器 鉢	口 16.0 高 9.6	丸底で体部は孤を描いて立ち上がり、口縁部は短く外反する。口唇部はやや丸みをもつ。口縁部は横ナデ。	含細砂 硬質	灰褐	3号 住居跡
5 2—5	土師器 椀	口 13.5 高 5.3	完形。丸底で体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は若干内傾する。口縁部は横ナデ。その他は摩滅のため調整不明。	含細砂 硬質	赤褐	6味 住居跡
6 2—6	土師器 椀	口 12.2 高 6.1	完形。体部は球形で口縁部は内弯ぎみに立ち上がる。端部はやや丸みをもつ。底部は丸底。口縁部は横ナデ。その他は摩滅のため調整不明。	含細砂 硬質	灰白	6号 住居跡
7 2—7	土師器 甕	口(14.8)	口縁部はくの字形に外反し、端部はやや丸みをもつ。口縁部外面はハケ目のあと横ナデ。内面はハケ目。	含細砂 硬質	褐	7号 住居跡
8 2—8	土師器 小型椀	口 8.2 高 5.6	丸底で体部は内弯ぎみに立ち上がり、口縁部は内傾する。口縁部は横ナデ。その他は摩滅のため調整不明。	含細砂 硬質	橙	6号 住居跡
9 2—9	土師器 小型丸底鉢	胴 8.3	体部は扁球形。口縁部はわずかに外傾ぎみに立ち上がり、接合部で剝離している。底部にうすく黒斑。	含細砂 硬質	赤褐	7号 住居跡
10 2—10	土師器 小型丸底鉢	口 6.6 高 7.3	体部は扁球形。口縁部はわずかに外傾ぎみに立ち上がる。内部に黒斑。内、外面とも摩滅のため調整不明。	粗砂多 軟質	橙	6号 住居跡
11 2—11	土師器 甕(破片)	———	複合口縁。頸部は強く屈曲し、外反しやや外傾ぎみの立ち上がり部が続く。口縁端部はわずかに外方にひきだされ面をもつ。	含細砂 硬質	灰褐	8号 住居跡
12 2—12	土師器 甕(破片)	底 4.0	平底。外面は右上がりの傾斜をもつタタキ目。内底はハケによる調整。胴部内面はケズリか？	含細砂 硬質	橙	2号住居跡 7号住居跡 付属溝
13 2—13	弥生土器 壺	口 18.2	複合口縁。頸部は外弯して立ち上がり、やや内傾する立ち上がり部が続く。屈折部は明瞭な稜をもつ。口縁端部は外側にわずかに肥厚。	含細砂 硬質	灰白	周溝墓 状遺構
14 2—14	弥生土器 甕	口 11.9 高 25.5	丸底。口縁部はくの字状に外反し、口唇部は薄い。胴部の最大径は下位にある。表面の一部にハケ目跡。	含細砂 軟質	橙	周溝墓 状遺構
15 2—15	弥生土器 甕	口 14.2	口縁部はくの字に外反し、口唇部は極端に薄い。胴の中位が強く張る。	含細砂 軟質	黄橙	周溝墓 状遺構

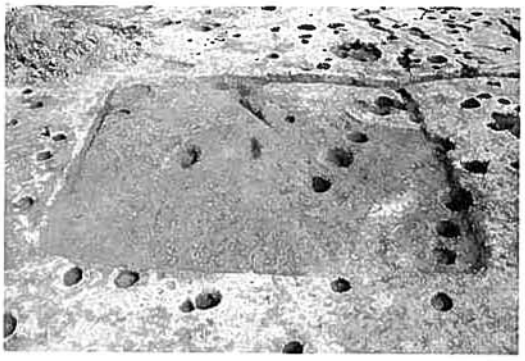
＊表中（　）で表した数値は推定値である。

第3表　出土石器観察表

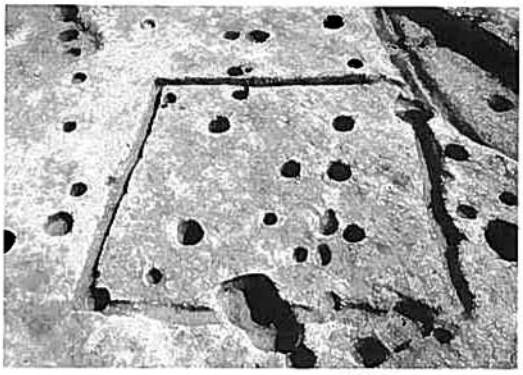
器種	挿図 番号	図版 番号	出土遺構	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)
石鏃	16	3—16	2号住居	凝灰岩	5.1	2.3	0.6	14.6
石剣	17	3—17	2号住居	流紋岩質凝灰岩	2.8	2.8	0.5	6.9
石斧	18	3—18	4号住居	緑色片岩	8.0	6.3	3.4	293.1
砥石	19	3—19	7号住居	粘板岩	10.0	2.8	1.3	70.0
砥石	20	3—20	6号住居	凝灰岩	6.6	3.2	2.6	77.5
たたき石	21	3—21	6号住居	安山岩質凝灰岩	13.2	6.9	3.9	601.1
砥石	22	3—22	8号住居	凝灰岩	14.2	5.9	4.1	503.1
石斧	23	3—23	周溝墓状遺構	砂質凝灰岩	12.2	4.6	2.8	279.8

（図版１）

▲１号竪穴住居跡



▲２号竪穴住居跡



▲３号竪穴住居跡

▲４・５号竪穴住居跡

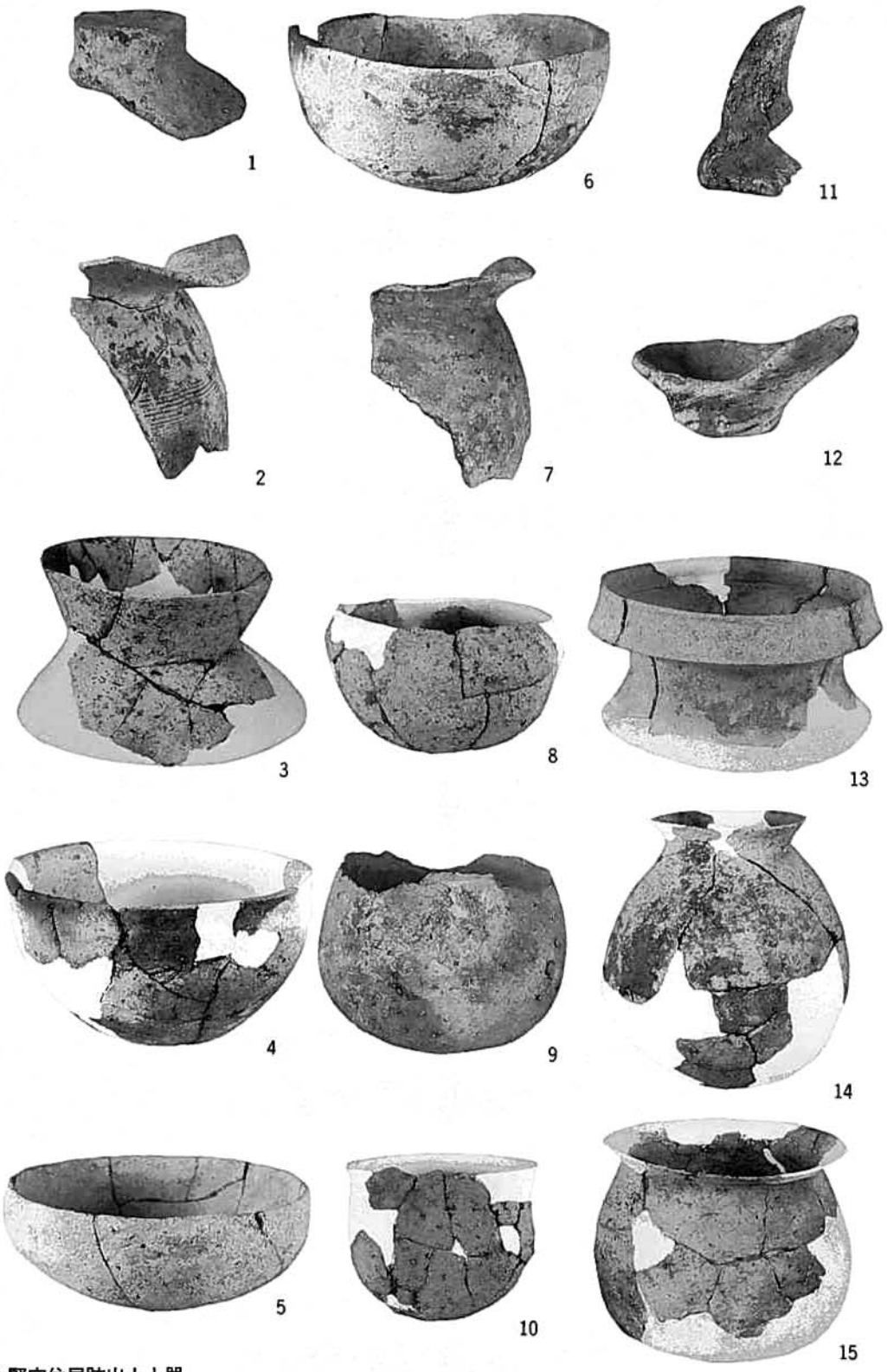
▲６・７号竪穴住居跡

▲８号竪穴住居跡

（北から）

（南から）

（図版２）



▲竪穴住居跡出土土器

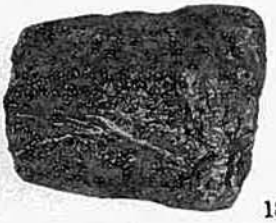
（図版３）

16

20

17

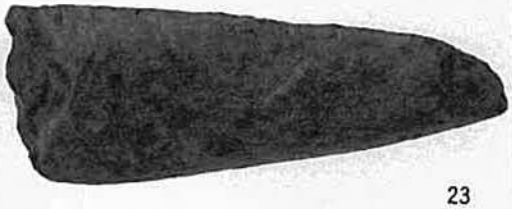
21



18

22

19



23

▲竪穴住居跡出土石器

3．掘立柱建物と土壙

掘立柱建物

1号建物跡…調査区の東端にある。10個の柱穴から構成される2間×3間の規模の建物。棟方向はほぼ東西。柱穴は約40～50cmと大きい。しかし、柱穴内に残る柱の痕跡からみると、柱の大きさは径20cm程度であったと思われる。

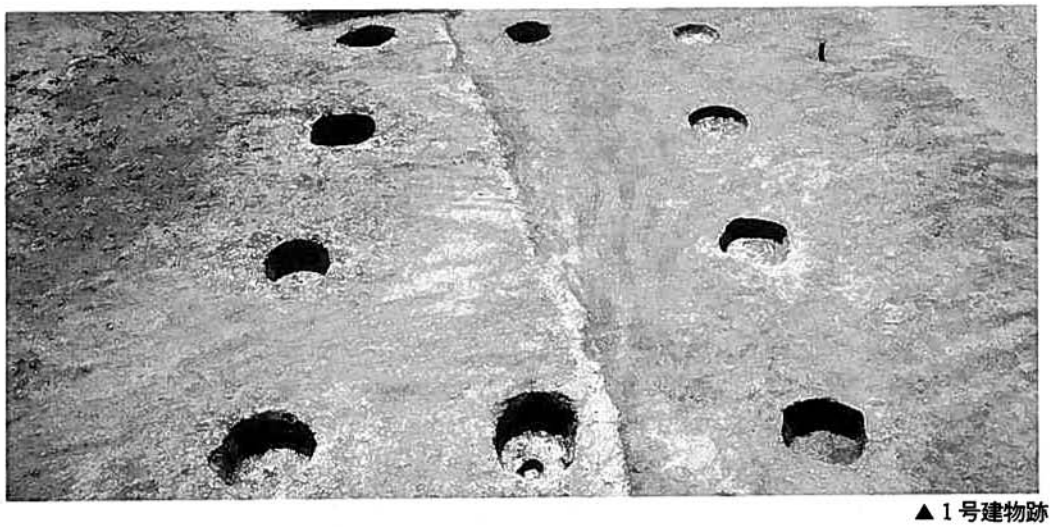
2号建物跡…II地区の中央やや西寄りにある。6個の柱穴から構成される1間×2間の規模の建物。柱穴は約20cmである。

3号建物跡…II地区の北端にあるが、北半分は畦畔で切られ不明。柱穴は約20～25cmで10個の柱穴から構成される2間×3間の規模の建物と推定される。

土　　壙

1号土壙…調査区の南東部にある。直径約2.7m・深さ約5cmの円形。土師器の破片が出土。

2号土壙…調査区の南部にある。直径約2.2m・深さ約6cmの円形。土師器の皿2枚・小皿4枚。土錘3点が出土。



▲1号建物跡

▲2号土壙出土遺物

Ⅳ　まとめ

今回の調査の結果、古墳時代初頭の竪穴住居跡８軒、弥生時代終末期の方形周溝墓と推定される遺構１基、中世の掘立柱建物３棟を含む柱穴多数、土壙２基などの遺構とこれらに伴って弥生土器・須恵器・土師器・石製品などの遺物が検出された。

遺跡は、北浦地方第一の広さを持つ日置平野西部の舌状台地先端部に位置している。北に雨乞岳、北西に油谷湾を望み、掛淵川を見下ろす標高約18m の台地上にあり、当時の人々が集落を形成するのに好適な条件をそなえている。また、当遺跡周辺には同種の舌状台地が幾筋も張り出しており、地形的な類似性から推すと、周辺台地上にも大規模な集落遺跡が存在する可能性が高い。

発見された最も古い出土遺物は、表面に羽状紋（うじょうもん）のある土器で弥生時代前期にあたる。このことは、今回の調査区内には発見されなかったが、周辺に同時代の集落が存在することを示唆している。

調査区北端（第Ⅰ地区）からは周溝墓状遺跡が検出された。墳丘や主体部と推定される部分の大半が削平を受け、幅約２ m 深さ約40cmのＵ字溝の南部８ m、北東部約４ m が残存するのみであったため、詳細については不明な点が多い。しかしながら、北東部の溝の床面に張り付いて検出された壺の口縁部が、畿内での編年の第Ⅵ様式（または庄内式：弥生土器の最後の形式、または古墳時代の最も古い形式）にあたり、遺構の形状からも周溝墓であると思われる。同様の周溝墓は県央の朝田墳墓群（山口市）、県東部の岡山遺跡（熊毛町）などでそれぞれ確認されているが、県西部では初めてであり、北浦地方の弥生時代から古墳時代に至る社会の動きを知る上で、新しい基礎的な資料として貴重である。

古墳時代初頭の集落関係の遺構は、主として調査区の中央西端に集中して検出された。竪穴住居跡７軒であるが、これらは、少なくとも２時期にわたってつくられたものである。しかし、実年代での時代幅は50年を越えないものと思われる。

住居で特徴的なのは２号竪穴住居跡である。中央やや南寄りを起点とした排水溝があり、いったん南壁に掘り込まれた直径約90cmの炉を経て、南壁の側溝とつながり、南西から屋外へ流れ出るよう工夫されたものである。竪穴住居の壁に接して炉がもうけられていることは、のちの古墳時代後期の竈（かまど）に移行する前段階のものとも考えられ興味深い。

周溝墓に隣接している１号竪穴住居跡は、他の住居群から外れた位置に発見されている。詳細な時期を決定する遺物はなく、他の竪穴住居群との関係は明らかでないが、地形や遺跡の分布状況からみると、他の竪穴住居群よりは古い可能性がある。

古墳時代初頭から中世までの集落関連遺構は、調査区のⅡ・Ⅲ地区のほぼ全面にわたってみ

つかっている。まず、復元できる掘立柱建物は3棟あるが、すべて棟方向を異にしている。これらの建物群は出土遺物から、中世期のものと考えてよい。

つぎに、第Ⅲ地区から土壙が2基検出されたが、これも底部に糸きり痕をもつ土師器（皿）などの出土遺物からみて、中世の建物群と同じ時期の遺構とみられる。また、土錘（どすい）（漁網のおもり）も3点出土しており、当時、海岸線が岡の鼻丘陵の直下まで進出していたと推定される油谷湾での漁撈の様子を物語っている。

（参考文献）

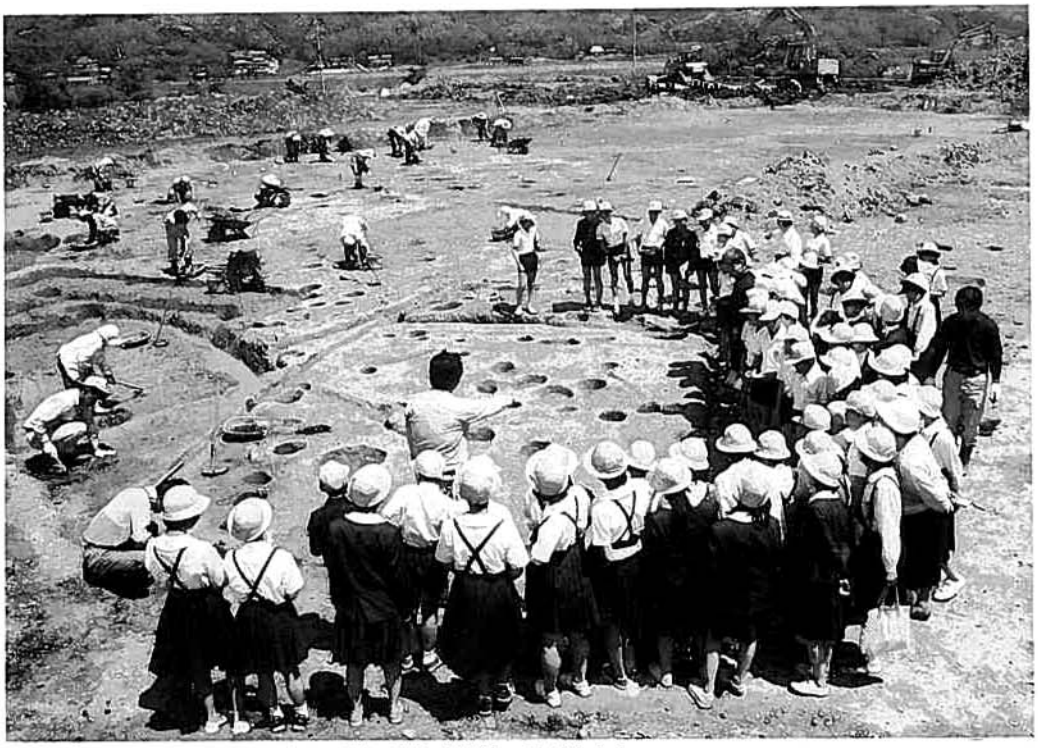
日置町史編纂委員会『日置町史』日置町　1983．3

山口県企画部「都道府県土地分類基本調査、阿川・仙崎」　1977．3

山口県教育委員会『たかはた―大津郡日置町高畑遺跡発掘調査報告書』「山口県埋蔵文化財調査報告書第94集」　1986

山口県教育委員会『朝田墳墓群Ⅰ』「山口県埋蔵文化財調査報告書第32集」　1976

山口県教育委員会『岡山遺跡―島田川中流域遺跡群の調査』「山口県埋蔵文化財調査報告書第99集」1987



▲現地説明会　　調査員の説明を聞く油谷小学校の子どもたち

OKANO — HANA SITE

YUYACHO, OOTUGUN, YAMAGUCHI — PREFECTURURE

by Takanori Takai

Michiyasu Fukusaka

1989

Organization of

Yamaguchi Prefectural

Board of Education

CONTENT

Chapter I Situation, environments of Okanohana — Site 1

II Progress of reseach 2

III Site and artifacts description 5

IV Conclusion 16

Appendix English, Korean, Chinese summary

The Oka-no-hana site is located at the top of a hill in the western Heki plain, the widest in the Kitaura province, which is part of the Yuya district of northwestern Yamaguchi prefecture.

The Oka-no-hana site has provided us with the remains of a settlement inhabited by people who had developed farming techniques.

As Yamaguchi prefecture, it is the first discovery of it's kind, and this report endeavors to explain the details of the 1988 archaeological excavation of the Oka-no-hana site.

Eight dwellings of the yayoi period were found tunneled into the earth along with a square tomb of the Kofun period surrounded by a ditch. Never before has a tomb like this been found in the northern coastal region of this prefecture. Also nearby were many settlement of approximately the same time period, and various stone and dred mud implements, in addition to pottery of the Yayoi, Sue, and Hazi styles.

冈之鼻遗址是弥生时代晚期至古坟时代初期的遗址。它位于山口县西北大津郡油谷町，标高18米舌头状台地尖端，望见掛渊川和油谷湾。该地具备着适于人类形成村落的条件。

1988年春在该遗址发掘了弥生时代至古坟时代的住房和墓址。在2,000平方米范围内，发现了坚坑式住房址8座（古坟时代初期）、方形周沟墓1座（弥生时代晚期）、掘立柱建筑多数（中世）等遗迹。同时发现了弥生土器陶片、须惠器、土师器、石制品等遗物。山口县西部地区第一次发现了周沟墓，这对了解山口县日本海沿海地区弥生时代至。

오카노하나(岡之鼻)遺跡은, 야요이(弥生)時代末期에서 古墳時代初期에 속하는 遺跡이다.

이遺跡은, 標高約18m 되는 舌状台地의 先端部에 位置하고 있어서, 키타우라(北浦)地方에서 가장 넓은 平野의 西部를 흐르고 있는 카케부찌가와(掛淵川)를 俯瞰 할 수있는 곳에 있으며, 그当時의 사람들이 聚落을 形成 하는데에 適合한 条件이 갖추어져 있다.

이遺跡으로부터는, 古墳時代初期의 遺物인 竪穴住居가 여덟채와 야요이(弥生)時代末期의 方形周溝墓가 1基, 中世의 토대 기둥建物等이 多数 発見되었다.

그밖에, 弥生土器・須恵器・土師器・石製品等의 遺物이 出土되었다.

方形周溝基의 発見은 山口県西部에 있어서, 처음 있는 일이며, 야요이(弥生)時代에서 古墳時代에 이르는 동안, 日本海沿岸에서 있었던 社会의 変動을 理解하는데에 있어 새롭고 基礎的인 資料로서 매우 貴重하다.

山口県埋蔵文化財調査報告 第119集

岡の鼻遺跡

—昭和63年度県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告—

平成元年2月

編集　財団法人　山口県教育財団
(山口市大手町2130)
山口県教育委員会文化課
(山口市滝町1－1)
山口県埋蔵文化財センター
(山口市春日町3-22)

発行　財団法人　山口県教育財団
(山口市大手町2130)
山口県教育委員会
(山口市滝町1－1)

印刷　大村印刷株式会社
(防府市仁井令1505)